

ラジオの奥底にあるもの

—古いメディアについての新しい覚書—

Issues in the Depths of Radio: A New sketches of an Old Medium

水越 伸*

Shin Mizukoshi

1. はじめに

私は1980年代後半、ラジオの歴史的研究から研究者としての道を歩み始めた。放送とは何か。このことを考えるために歴史的なアプローチを採り、テレビからラジオへ、さらにそれ以前の無線へ、電話へとたどっていった。そのなかからとくに、20世紀初頭の無線からラジオへの変化に焦点をあて、放送が当たり前のメディアとなる以前の状況や、ラジオがいくつかのオルタナティブな発展のしかたを可能性として持っていたことなどを明らかにした。人々が自明にしているラジオ、放送の姿をとらえなおし、その奥底にあるものを探ろうとしたのだ¹。

その後、私は電話やテレビ、コンピュータ、インターネットなどと歴史的研究の対象を広げ、個別メディアの歴史よりもメディア史という方法論的思考そのものに興味を持つようになった。メディアの基本的なかたちが大きく変化する歴史的な画期を見つめることからメディア論そのものを浮上させることに興味移っていったのである。そのため、たとえば戦時期や

第二次世界大戦後のラジオの歴史的研究など、いわゆる通時的なラジオ研究には本格的に取り組まないできていた。ラジオは私にとって研究の原点にあり、つねに立ち戻って参照するメディアだったが、90年代後半以降、踏み込んだ研究はしてこなかったのである。

ところが2010年前後から、ラジオに関するメディア・リテラシーの実践やシンポジウムを開催したり、微弱電波ラジオの実践をおこなうなど、あらためてこのメディアに触れ、考える機会が連続するようになった。それらの経験はかつての歴史的研究とも呼応し、2010年代も半ばを過ぎた現在、私にとって新たな意味合いを持ち始めている。

この論考は、私が経験したラジオをめぐるいくつかの活動のエッセンスを綴るエッセイである。その中でラジオを論じる意義を浮き彫りにし、それらがメディアの生態系をとらえるためのいかなる可能性を持っているかを考えてみたい。

* 東京大学大学院情報学環・教授

キーワード：ラジオ、コミュニティ、デジタル・ストーリーテリング、メディア・リテラシー、メディア論

2. 民放連プロジェクト南海放送実践

私はメルプロジェクト、マス&コミュニケーション・プロジェクトという共同研究の仲間とともに、2001年から断続的に約10年にわたって日本民間放送連盟と共同研究（以下、民放連プロジェクト）をおこなった。その仕組みは次のようなものだった。まず民放連が約200局の加盟局から毎年実践参加局を公募し、3局程度を選ぶ。私たちのプロジェクトは、それぞれの局や地域、参加する青少年の特性に合わせたメディア・リテラシーのプログラムをデザインし、放送局や地域住民と協力しながら実践をおこなう。私はこの全体を総括し、2000年代を通して全国各地の20近い地域を飛び回っていた²。

民放連プロジェクトは当初、テレビのメディア・リテラシーを前提にはじまったが、2008年にはじめてラジオ局での実践をおこなうことになった。愛媛県をカバーする老舗ラテ兼営局南海放送（RNB）においてである。このエッセイに引きつけた場合、すでに実践から10年近くの歳月が経ってはいるものの、依然として南海放送実践から見出せることはある。そのことを記しておきたい³。

民放連プロジェクトはもともと、放送局員と地元の青少年が共同で番組づくりを進め、その過程で受け手で素人の青少年が放送について学ぶとともに、送り手でプロの放送局員もまた放送を学びなおすこと、すなわち送り手と受け手がともにメディア・リテラシーを体得していくことを目指していた。こうした実践の経験が、いずれデジタル時代において地方放送局が徐々に市民参加型のローカルメディアとして変化、

発展していくためのきっかけとなることをも想定していたのである。

私たちは2008年度当初、南海放送ラジオにおいても放送局員が青少年とラジオ番組づくりをおこなうことを想定していた⁴。しかし音声だけで構成されるラジオ番組は相対的にみてテレビのそれよりも簡素である。その簡素さを人々が想像力で補い、深い番組文化、聴取体験が導かれる。しかしラジオを好意的に評価する際の常套句となったそうしたことがら、端からラジオを知らない青少年に通じるのか。また南海放送では全国各地の老舗ラテ兼営局と同様、AMラジオの長期低落傾向が続き、この年には若者向けラジオ番組を編成表からなくしてしまうことを真剣に考えるほどだった。現場にはテレビほどの余裕はなく、番組づくりを協働することではたしてなんらかの異化効果、日ごろ当たり前前に接しているメディアをこれまでとはちがったかたちでとらえなおす契機を生みだすことができるのか。私は大いに疑問に思っていた。

2008年7月、小川明子、飯田豊らと松山市内で話し合ううちに私が思い出したのは、子どもの頃にすんでいた石川県の北陸放送（MRO）ラジオの「日本列島ここが真ん中」という番組のことだった。この番組は1970年代前半にスタートした、いわゆるワイド番組のさきがけだった。中継機材を積み込んだワンボックスカーに、局アナと地元に来たタレントや歌手（永六輔や荒井由美を思い出す）が乗り込み、町の隅々を走り回って声を拾い、伝言を届け

る。猫を引き取ってほしい人がいると生放送でアナウンスし、ほしい人にその猫を届けるなど、とりとめもない日常を電波に打ち上げ、リスナーが共有するというスタイルだった。おそらくは全国に先駆けてスタートした地域密着型ワイド番組だったはずで、少なくとも70年代、石川県では大いに人気があった。地域コミュニティと電波の共同体を重ね合わせ、電波によって地域を再認識する。そのこと自体がおもしろかったのである。同じようなことが南海放送ラジオでできないか。ただしたんなる地域密着型ワイド番組はすでに沈滞化してしまっている。

そこで私たちが考えたのはある意味では奇想天外な、ある意味では古典的な仕掛けだった。その概要を示しておこう。地元の青少年がいくつかのグループをつくり、各グループがケータイで松山各地の人々の様子を動画で録画する。その動画を専用ウェブサイトにアップする。この実践と同時にスタートした若者向け番組で、ウェブサイトにアップされた動画を音源として利用したり、ケータイ・クルーとなった青少年たちに出演してもらうなどする。リスナーはそのウェブサイトをチェックしながらラジオを聴くことができる。この仕掛けには、当時並行して進めていた「メディア・エクスプリモ」(JST CREST研究)において開発したシステムとワークショップ・プログラムの総称「ケータイ・トレール!」が用いられた⁵。

高校生のケータイ・ク

ルーが地元をまわって人々の様子を録画するといっても、いきなりではなかなかうまくいかない。取材する側、される側が共有できるある種のかたちがあるとよいだろう。そこで考えられたのが「ケータイ・トレール!」だった。すなわち、ある人が直前に録画されたメッセージのなかで投げかけられた質問に答え、次にメッセージを受け取る人に向けて質問を投げかけて終わるといってお話の一連のかたちを生み出したのである。これを用いれば、ケータイとは言えカメラを持ったクルーに取り囲まれた人々でも、あまり緊張せずに話ができるだろうし、そのメッセージが街の人びとの間を結びつけていくことになる。それらのメッセージは、ウェブサイト上で一連のメッセージのサムネイルが連結しつつ、生き物が動くような感じで可視化された。こうして2008年度後半、新規スタートした若者向け番組と連動して、県内高校生14名が4つのグループに分かれてケータイ・クルーとなり、「ケータイ・トレール!」を用いた取材と番組づくりをおこなった(図1、2参照)。

このエッセイに引きつけた場合、南海放送実践から何を見出すことができるだろうか。それ



図1. ケータイ・クルーの様子



携帯版

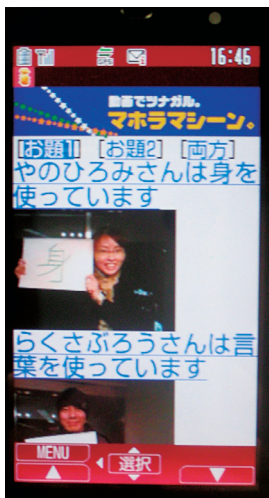


図2. ケータイ・トレールの画面

はラジオに必要なメディア・リテラシーとして、送り手と受け手がともにラジオのコミュニティを再認識し、その共創に参画することを位置付けた点にあった。たしかに個別のラジオ番組を作ることから学べることもあるだろう。しかし電波塔から打ち上げられた特定周波数の電波がドーム状に拡がって可聴範囲を形成し、その中の人々が同じ時間の流れのなかで音声作品

を媒体として体験を共有すること、コミュニケーションすること、そうしたメディアとしてのラジオの奥底にあるものの魅力を再認識することは、ネットとモバイルを用いればいつでもどこでも音声作品を聴取できる現代社会において、じつはかなりむずかしいことだ。その魅力を再認識するところまで降りていかないでにおいて番組づくりだけを学んだとしても、それはラジオならではのメディア・リテラシーとはいえないだろう。

高校生たちはケータイを用いた取材を通して街の人々の何気ない日常の物語をつないでいくこと、番組に出演すること、それらが家族や友人に聴かれること、あるいは自分自身も聴くことなどを通じて、ラジオの送り手と受け手の両方の役割を数ヶ月間ではあれ引き受け、つねにラジオのコミュニティを生みだし、発展させていくことに気を配ったのだった⁶。

この体験は高校生たちに、ラジオを他のいくつかから選択可能なメディアとして選び、音楽やおしゃべりなどを楽しむリスナーの立場から、ラジオが可聴範囲の社会の隅々にまで行き渡り、人びとの間にさまざまなコミュニケーションをもたらし、経験の共有や意見の交流を引き起こすことを意識しつつ、表現を通してそれを仕掛けていく放送人の立場への変換をもたらしたとあってよい。すなわち日々暮らしている松山市にラジオ局がたまたまあるのではなく、ラジオがもたらす松山、ラジオの松山が意識され、そのコミュニティに参画するという社会的行動が生じたのである。それが南海放送実践がもたらしたラジオのメディア・リテラシーであった。

放送に参画してラジオのコミュニティを意識すること、それ自体は取り立てて目新しいことではない。全国各地のラジオの編成表に見られる地元大学生による若者向け番組や地域住民によるコミュニティFMもまた、それがあからこそ成り立っているといえるだろう。ただし今日、他の様々なメディアのあいだでラジオに注目し、それがもたらすコミュニティを意識するためにはどうすればよいか。ごく一部の人がラジオに関わる機会は多々あるが、その機会をより多くの人々にもたらすためにはどうすればよいか。これが課題であろう。2008年のわたしたちは、当時業界ではやっていたクロスメディアという用語を用い、ケータイ、ウェブなどのクロスメディア戦略でそれを進めたのだった。今日民放ラジオを見渡しても、この課題に有効に取り組む事例を見出すことはむずかしい。SNSの利用は当たり前となったが、SNSのコミュニティにラジオだからこその役割を見出すこともむずかしいのである。そしてそれはやデジ

タル・メディアをまったく抜きにしてラジオのコミュニティを生み出すことも不可能になっている。

南海放送では残念ながらこの実践からなにかが根付くことはなかった（ただし、2016年2月現在、南海放送ラジオから若者向け番組がなくなっていないことだけは確認できる）。しかし南海放送実践の翌2009年度、ラジオ単営局である和歌山放送が民放連プロジェクトに名乗りを上げた。その実践は飯田豊、沼晃介らを中心に南海放送と同じ二つのプロジェクトの共同で進められた。さらに2010年度、「ケータイ・トレール！」に興味を抱いたチューリップテレビ（富山県）とのあいだで応用的なメディア・リテラシー実践「とやまフォト川柳」も実施された。デジタル・メディアを援用しつつ、送り手と受け手がともに電波共同体を意識し、その中を生きていくことの意義を理解する人々や放送局は命脈を保っているといえる。

3. シンポジウム「ラジオのメディア・エコロジー」

2012年はじめ、文化社会学者の毛利嘉孝から声をかけられて、ラジオについてのシンポジウムをやってみようということになった。当時毛利と私は芸術と社会の相関をあきらかにする科研費プロジェクトのメンバーであり、その一環として「今、ラジオだよね！」と意気投合したのである⁷。芸術と社会の相関を考える研究の一環として、2012年という時点でラジオという古いメディアで意気投合できるとはどのようなことか。それはおいおい説明するとして、意気投

合できたこと自体、私は愉快だった。

シンポジウムは2013年11月16日（土）に山口情報芸術センター（YCAM）で開催された。それは二つのセッションと二つのワークショップから成り立っていた。タイトルは「ラジオのメディア・エコロジー」。新しいメディア状況のなかでこの古いメディアの位置づけがどのように遷移してきたのか、どのような可能性をはらんでいるのかについて、研究者、アーティスト、アクティビスト、市民らと話し合う場を生

みだそうという着想だった。

このシンポジウムの着想の種となったことがらをあげておこう。

まず毛利と私はこれ以前ほぼ同時期に、ラジオ・アーティストと称される毛原大樹に出会っていた。毛原大樹は東京都心の学校跡地など各地で微弱電波を用いたラジオ放送の実践をおこなってきていた。参加者はFMトランスミッター、金属線で作ったアンテナや受信機を用いてアナログ放送の送受信を実体験する。それを通して今や古くなってしまったアナログ放送技術、その背景にある電磁波理論の知識をあらためて理解するとともに、ラジオの送受信がもたらす共同体、共同体意識を実感することになる。こうした活動はデジタル技術が当たり前となり、ネットやスマートフォンに慣れ親しんだ現代の人々に新鮮な衝撃を与えたのだ。私にとって毛原の実践は、かつて注目していた20世紀初頭世界各地に現れたアマチュア無線家、無線少年らの活動そのものだった。それが現代においていかなる意味を持つかはすぐに理解することができた。

つぎに毛利はアート・アクティビズム、DIY文化、さまざまな音楽シーンと実践的に関わりながら研究に取り組んできた。毛利は半径数百メートルにも満たない可聴範囲の一時的なラジオが人々をとらえ、小さなラジオが瞬時にグローバルなつながりを持つような可能性に興味を持ってきていた。そして1980年代に華々しく文化批評を展開した粉川哲夫などを再評価しつつあった。一方、毛利と同世代の私は粉川哲夫の自由ラジオに学生時代に出会い、それに魅了された一人だったが、それは自分がメディア論

に取り組む前提となった過去の事例だととらえていて、取り立ててふり返ることはなかった。そのため毛利が粉川や自由ラジオを口にしたときに、なぜ今さらそんな当たり前のことをとくすかに戸惑いをおぼえた。しかし考えてみればすでに30年前後の歳月が経ち、今や多くの人があの時代のオルタナティブ・メディア、あるいはニューメディア批判の動きを知らない。毛利はそれらを今一度よみがえらせ、現代的状況のなかであらためてその意味を問おうというのだ。少し話すうちに、その意図と意義がわかってきたのである。

その概要を説明しておこう（詳細は図3と4を参照）。

まずは二つのワークショップをおこなった。



図3. シンポジウム・ポスター
(デザイン・杉本達彦) 表面



図4 シンポジウム・ポスター裏面

一つはYCAMで聴くことができる微弱電波ラジオ、ライブラリーラジオのメンバーをおこなった「ボイスアーカイブ・ワークショップ」である。当日YCAMを訪れた人たちに、「20歳の自分にいたいこと」「最近あったよいこと」という誰でも答えることができそうな質問を投げかけ、メッセージを録音する。それをそのままライブラリーラジオで放送するというものだった。もう一つは、毛原大樹によるワークショップで、任天堂のファミコンのFMトランスミッターを活用してラジオの送受信実験をおこなうというものだった。

ライブラリーラジオはもともと、桂英史が主導してYCAM、川口市メディアセブン、せんだいメディアテークなどに展開していったもの

である。図書館とラジオの深い関わりは20世紀初頭にまで遡るもので、図書館情報学を専門の一つとする桂がそれを現代的によみがえらせたのだった。微弱電波ラジオ、YCAMという施設に行かなければ聴くことができないラジオ、そんな小さなラジオを用いてYCAMと山口市をマッサージしていこうという意図が読み取れる。私たちはライブラリーラジオを運営する元気の地元の方々とともに企画を練り、彼ら・彼女らが人々の声を集めたのだった。

毛原のワークショップは当初、粉川哲夫に依頼したものだったが、諸般の事情で粉川が急に来られなくなったためをお願いした。ファミコンというノスタルジックなガジェットがラジオ送信機に生まれ変わることで、半径数メートル前後でしか聞こえないにもかかわらず、そのことは多くの参加者に新鮮な驚きを与えていた。私は当初、地元のラテ兼営老舗局の山口放送に参加を呼びかけ、マスメディアとしてのラジオとマイクロメディアとしてのライブラリーラジオが同心円状で放送するような多元的イベントを考えていた。山口放送はかつて民放連プロジェクトを実践した、メディア・リテラシーなどに積極的な局であったが、諸般の事情からそれはかなわなかった。

つぎに、二つのセッションがあった。一つは「ラジオ生態系の遷移」というタイトルで私が司会進行をし、「日本のマスメディアとしてのラジオ、コミュニティ・メディアとしてのラジオに複眼的に焦点をあて、現場の実践を踏まえながらその現在、過去、未来を語り」合う内容だった。さきのボイスアーカイブ・ワークショップ、ラジオ送信機づくりのワークショッ

プの内容も織り込んだ。もう一つは毛利が司会進行をし、海外とのスカイプ中継も用いながら進めた「ラジオの身体・ラジオの政治」というセッションだった。このセッションでは、「現在『ラジオ・アート』と呼ばれる領域でいかなる実験が起きているのでしょうか？今この半径数メートルで起きていることが一気にグローバルに広がることの可能性とその課題をラジオの実験、実践を通じて体験しつつ、ラジオと表現、そして身体と政治の関係を考え」というものだった。

「ラジオのメディア・エコロジー」は、私にとってラジオを本格的に考え直す、貴重な機会となった。ラジオのテクノロジー、それがもたらす共同体、デジタル・ストーリーテリングとの結びつきなど、いくつものアプローチがあることがわかった。

このシンポジウムを毛利らとともにいっしょに進めた3名の仲間、飯田豊（立命館大学）、土屋祐子（広島経済大学）、林田真心子（福岡女学院大学）の事後のコメントを掲載しておこう⁸。

飯田豊（立命館大学・准教授）

「(1) 民放連メディアリテラシー実践プロジェクトなどを通じて、ラジオ局と地域の子どもたちによる番組制作に関わってきた。2008年度に南海放送ラジオと取り組んだ活動では、ケータイやウェブと連動させるクロスメディア展開によって、ラジオに新しい価値を見出すことを目指した。ラジオに関心を持って活動に参加してくれた高校生たちの趣味嗜好は多彩で、学校で仲良くなることもなければ、ネットでつ

ながることもなさそうな、そんな顔ぶれが一堂に会し、苦楽を共にして番組制作を達成したことが、今でも強く印象に残っている。

(2) 若者に馴染みがないラジオを「ニューメディア」として捉え直し、原体験を持っていない新しいリスナーの獲得を目指そう——そんな声が聞かれるようになって久しいが、その道筋は決して明瞭ではない。国内外の各パネリストが取り組んでいる多様なラジオ実践、そして毛原大樹さんのワークショップによって、ネット時代のラジオ文化のあり方を具体的に考える手がかりを得ることができた。」

土屋祐子（広島経済大学・准教授）

「私は広島市安佐南区のコミュニティ放送「FMハムスター」で2013年3月までの4年間、毎週1時間番組を学生と一緒に作っていた。トークを中心にしたラジオ作りの魅力の一つに人が集って話をし、そこから新しい関係が生まれる、ということがあると思う。そうした経験も踏まえつつ、セッションではコミュニティFMやミニFMなどマスでなくメゾやミニレベルの広がり多様なラジオの動向について話した。特にこうした小さなラジオは東日本大震災時に、マスからこぼれ落ちた自分の周囲の情報を伝えてくれる、人のぬくもりを感じられるメディアとして見直された。マスラジオ産業の状況は厳しいが、自分たちのメディアを持つためのラジオへの期待は高まっている。課題として、こうしたラジオの多様性が個々の作り手に見えておらず、相互作用が生まれづらいことをあげた。

みなで話している中で改めて気づいたこと

は、例えば戦後の放送の民主化への転換の中で生み出されたクイズや歌などのラジオ番組は今のテレビ番組に近いように、これまでもラジオは変容を重ねてきたことである。今ラジオの輪郭がぼやける中、作るラジオの面白さを追求してみたいと思った。」

林田真心子（福岡女学院大学・専任講師）

「Session1では「現在」「過去」「未来」とラジオの生態系の遷移をたどるなかで、「未来」へむけた活動の一つとして私が紹介したのは、大学生と放送局による共同的なラジオ実践であった。福岡女学院大学人文学部のメディア研究ゼミが、九州朝日放送（KBC）とともに2013年度より行っているもので、ラジオの未来を描くために、まず、私たちの日常的な音との関わりから、改めて考えていこうというメディア・リテラシー実践である。学生と放送局のスタッフがそれぞれにスマートフォンやICレコーダーで身近な季節の音を集め、それを音のストーリーに再編集し、AMラジオ番組でオンエアする。その過程を通して、互いの音の経験を共有する。また、ラジオが伝える音がいかに構成されており、私たちの音の環境と接続しているかを議論するものである。会場からはKBCの担当者もコメントを寄せた。マスメディアだけでない、ラジオの複数性、その生態系の

4. ラジオ『5』

2015年初頭、キム・ジリクが私にラジオをやらなかと持ちかけてきた。それがきっかけとなって私は、おもにアメリカの公共ラジオ

中からラジオの未来を描いていくという視点で、改めて実践を捉える大切な機会となった。」

その後、飯田は中国放送の若者向け番組への出演を繰り返し、土屋はコミュニティFMとの関係を深め、林田は九州朝日放送ラジオの朝のワイド番組のパーソナリティを務めた。ラジオは私たちにとって実践的に取り組むべき対象となって今日に至っている。

私は2014年度、大学院学際情報学府の授業「メディア表現論」において、毛原の助けを得て微弱電波ラジオを学生たちとともに組み立て、オンエアするという実践をおこなった。研究室がある本郷キャンパス福武ホールという建物全体をカバーするのが精一杯という可聴範囲ではあったが、自ら組み立てたラジオでメッセージを送り、仲間とともに携帯ラジオでそれを受けるという体験は、私や十数名の学生のメディア論的想像力を大いに刺激した。

私はこの微弱電波ラジオを年に数回、日時を決めてオンエアする活動を継続的におこなっていかうと考えたが、15年度にはそれをおこなえなかった。ただしこれは後述のストーリーテリングと対をなす、ラジオ『5』の一つのあり方として今後も忘れずに取り組んでいくつもりでいる。

（NPR）加盟局がつくっている録音構成番組、あるいはストーリーテリング番組をよく聴くようになった。この聴取体験は私にとって深いも

のだった。

まずは前提となることを説明しておきたい。私は先述の毛利嘉孝、佐倉統、宮田雅子、田中克明、そして松井貴子とともに、2014年に小さなバイリンガルの独立雑誌『5: Designing Media Ecology』を出版しはじめた。この雑誌は、内外各地に散在するメディアとコミュニケーションに関わる理論的知見と実践的経験を架橋するためのリトルマガジンをうたっている。2016年現在、年2回、450部を出版し、その大半は編集メンバー6名によるイベントなどでの売りだが、気の利いた本屋でも販売してもらっている。あくまでも学会誌ではなく雑誌を、小さくても世界各地で読まれ、それをもとに議論が生まれるような広域志向性のあるメディアを目指している。

この雑誌の英文コピーエディットを担当しているのがキム・ジリクだ。彼はオーストラリア放送協会などでラジオ番組の制作に携わった経験があり、『5』の編集方針を理解し、手弁当でサポートしてくれている。その彼が『5』と同じことをちがうメディアでやること、自分の好きなラジオでやることを模索し、私に相談を持ちかけてきたのである。

ジリクが私に教えてくれたのは、たとえば『This American Life』(WBEZ, Chicago)、『Radiolab』(WNYC, New York)、『The Organist』(KCRW, Santa Monica) などアメリカ公共ラジオ(NPR)加盟局の番組シリーズだった。作品といってよいかもしれない。それらは十数分から長ければ1時間を超える録音構成番組だったが、ジリクがとくに興味を持っていたのは市井の人々と制作者の何気ない対話

の中からその人の人生や家族の歴史、地域の問題などに深く入り込んでいくタイプの番組で、それらはストーリーテリング番組といってよいようなものだった。そして私もまた、ジリクのこのような番組に思わず聴き入る毎日を送ることになって今日に至っている。

日本にもラジオ・ドキュメンタリーという番組様式は、少ないながらも存在する。古くはラジオ・ドキュメンタリーがテレビに移植されて、草創期の日本のテレビ・ドキュメンタリーがはじまったことも、歴史的に知られていることだ。しかしそれらの番組は、社会問題を暴き出す調査報道の様式に則ったもの、マスメディアとしてのラジオが社会の争点となるべきことながらを見出し、告発し、問題提起する、そうしたタイプのものではほぼ占められているといつてよい。

ところがアメリカのストーリーテリング番組は、それらとは似て非なるものだ。端的にいえば、90年代以降に発展してきたデジタル・ストーリーテリングと同様の様式であり、人々が身近なことから、社会的に大きな争点とは言えないが個人や地域にとって意味のあることがらを丁寧に取り上げ、多面的に物語っていくタイプのものだったのである。

それらはいずれも社会的争点を追うだけではなく、音への深いこだわりを持ち、きわめて密度の高い音声表現となっている点において、大半の日本のラジオ・ドキュメンタリーとは次元を異にしている。

なぜこうした番組がNPRネットワークに顕著なのか。その背景にはおそらく北米におけるストーリーテリングの伝統が横たわっているは

ずだ。また、世界のラジオのなかでNPRがおかれている位置づけや特性にも拠っていることだろう。このあたりを詳らかに調べることは、いずれ機会を見て取り組んでみたい。

いずれにしても私たちは、このようなストーリーテリング番組をラジオ『5』として制作し、ネット上で公開していくことを目指している。私たちはラジオ『5』を紙の雑誌『5』と密接に結びつけながら、相対的に異なるメディアとして展開していければと考えている。

ストーリーテリング・ラジオは、先にあげたコミュニティとしてのラジオやその微弱電波ラジオなどとは対極をなすあり方だといえる。ストーリーテリング・ラジオは、乗り物が電波であろうとネットであろうとかまわない。音声表現の可能性を追求する一つの表現様式である。媒体を問わないそれは、ある意味ではラジオと

はいえない。ところがストーリーテリング・ラジオは録音構成作品として独自のコミュニティを持つ。それは国境を超え、時間を超え、その気になれば何度も聴くことができる作品として電波とデジタルの融合した中に存在する。聴取者は全米各地に拡がり、かつてのマスコミュニケーションではなく、小さな聴取コミュニティの群体のようなものとして存在しているのだ。

しかもストーリーテリング・ラジオは、マスメディアが志向する大きな物語ではなく、小さな物語を録音構成によって結晶化することをおもな目的としている。あるときには身近な環境問題に警鐘を鳴らし、あるときには音声の芸術的表現の可能性を実験する。このような志向性は、ラジオのコミュニティの成立に不可欠なのであろう。

5. さまざまなラジオとメディアの生態系

2015年10月、私は北海道コミュニティ放送フォーラムで講演をする機会を得た。私があるラジオ番組に出演したのを偶然聴いた関係者から声がかかったのである。テレビでも同じようなことがあるが、ラジオに出演すると、ドライブをしていたら偶然水越さんの声が聞こえてきたよなどという連絡をもらうことがしばしばあるものだ。ちなみにその番組のテーマはラジオそのものだった⁹。

北海道名寄市で開催されたこのフォーラムで、私ははじめて大勢のコミュニティFM関係者と話をする機会を得ることができた。私はこれまで、市民メディアやコミュニティ・メデイ

アなど、小さなメディアに焦点をあてて研究をしてきたが、コミュニティFMにはあまり関わってこなかったのである。フォーラムの前で関係者が異口同音に語ってくれたのは持続的運営のむずかしさであり、にもかかわらずそれが持つメディア論的な魅力であった。このフォーラムで得られた知見を私なりに整理を試みると次のようになる¹⁰。

(1) 財源を確保することがむずかしい。コミュニティFMは市町村レベルの、文字通りコミュニティのために日々サービスを行っているが、それを公共的な活動として認めてもらうことが

なかなかできず、自治体など公共セクターから公的資金を導入する際に苦労が絶えない。本来であれば公共的な活動として公的資金を一定程度投入することが制度化されればよいのだがむずかしく、お金を頂戴するという態度でアプローチせざるを得ない。新機軸がどうしても必要になってきているという。このためか、私が講演の中で話したテレフォノスコープという、古い電話機にiPhoneアプリを組み込んだ音声だけのデジタル・ストーリーテリングのことは、多くの聴衆がその意義を瞬時に理解し、興味を持ってきていた。これはマスメディアのラジオ関係者ではあり得ないことだと思った。

(2) 放送に関わる市民メンバーが固定化し、コミュニティから浮いてしまうことがしばしば起こる。一方で小さなメディアなので関係者はみな表現者であることがほとんどである。みんながラジオの魅力や問題点を身体で理解しているという印象を持った。それはすなわち、メディア論的な想像力を体得しているということで、ローカル民放をはじめ大手メディア然としたところで官僚化が進んでいる状態とはずいぶんちがっている。そこに可能性はある。

(3) 大都市よりも小さな町のコミュニティFMの方がおしなべて活性化している。たとえば札幌は2015年現在、人口195万の大都市で面積も広大である。そこに民放ラジオが7局、コミュニティFMも7局存在している。こういう状況だとリスナーはコミュニティFMだからといって特別には思わず、いくつかの中から選択できるラジオ、ワンオブゼムとしてとらえるため、いき

おいマスメディアのラジオとの差分を考えながらの放送となり、コミュニティFMならではの特性を出しにくい。これに対して釧路、室蘭、留萌、名寄など、その地域のメディアが事実上コミュニティFMしかないようなところでは、まさにコミュニティのためのメディアとして縦横に動くことができ、住民からも支持される。

以上が限られた知見であることはまちがいないが、しかしそこにはあらゆるタイプのラジオに共通する特性と、その可能性や課題のほとんどすべてを見て取ることができる。NHKや民放などマスメディアのラジオ、微弱電波ラジオ、コミュニティFM、これらは電波技術の観点からすれば、あるいはメディア論的に見ればすべて同じラジオだ。それらは社会状況や制度政策によって分化して進化して、表面的には異なるもののように見えているに過ぎないといえる。ところが分化して固定化したラジオを総合的にとらえなおし、それらの奥底に通底するものについて論じられることはほぼなかったといつてよい。微弱電波ラジオの自由はそれが一過性であることに依るところが大きい。一過性のものが定時化したとき、そこには日常生活世界のさまざまな規範と自明性が覆いかぶさる。それがコミュニティFMの現状だろう。東日本大震災を契機にラジオが見なおされたその奥底にあったものは、ラジオ・アートやアクティビズムがもたらす非日常的な電波共同体の体験そのものだろう。一方でストーリーテリング・ラジオのように結晶化した作品は、電波共同体を離脱し、音声メディアの古典的な可能性を示している。しかし日本のマスメディアのラジオは、少なく

とも2016年現在、それには取り組んでいない。そもそもある地域のメディアの生態系のなかでラジオが脇役なのか主役なのかによってそのあり方も大いにちがっているが、全国津々浦々テレビが繁茂し、ネットとモバイルが一般化した日本社会のなかで、ラジオの可能性が生き生きとみられるのは、北海道など広大な地域に散らばる小規模な市町村ということになっている。

ラジオの奥底にあるものについてのメディア

論は、思弁的な議論ではなく、さしあたりはこうしたさまざまなラジオを形態学的に分析することから見出せるのではないだろうか。そしてこの古いメディアに注目することからメディアの生態系を探ることは、デジタル言説とグローバル言説に絡めとられがちな私を含めたメディア研究者にとって、一つの有効なアプローチだといえる。

註

- 1 水越伸（1993）など。
- 2 民放連プロジェクトについては各年度の報告書が民放連から刊行されているほか、その成果をまとめたものとして東京大学大学院情報学環メルプロジェクト・日本民間放送連盟編（2005）がある。
- 3 南海放送の実践記録については、日本民間放送連盟編（2009）、およびマス&コミュニケーション・プロジェクトのブログがある。
- 4 南海放送実践に参画したのは私の他、飯田豊、小川明子、駒谷真美、下村健一、沼見介であり、マス&コミュニケーション研究とメディア・エクスプリモという二つの研究プロジェクトが連動して進められた。
- 5 「ケータイ・トレール！」は阿部純、杉本達應、鳥海希世子、沼見介、宮田雅子らが中心となって「メディア・エクスプリモ（情報デザインによる市民芸術創出プラットフォームの構築）」（JST CREST研究：代表・須永剛司）の水越伸グループと堀浩一グループが共同開発し、各地で実践をおこなった。アルス・エレクトロニカ2008においても実践され高い評価を得た。ちなみに南海放送のラジオ番組名は『第一マホラマ。学園』だったので、この実践当時、「ケータイ・トレール！」は「マホラマシーン。」と呼ばれていたが、ここでは「ケータイ・トレール！」で統一しておく。
- 6 日本民間放送連盟編（2009）に掲載された高校生らへの駒谷真美によるインタビューを参照。
- 7 毛利と私はいずれも、文科省科学研究費基盤B「社会システム〈芸術〉とその変容」（2011-13年度、長田謙一代表）の分担研究者であった。
- 8 三名はいずれもセッション1「ラジオ生態系の遷移」に登壇した。以下は、いずれも2014年7月11日にメールで送られてきたものである。
- 9 NHK FM『トーキング ウィズ 松尾堂「ラジオとつき合う」』（松尾貴史、加藤紀子、ゲストとして谷川俊太郎とともに出演）2015年7月12日12時15分～14時放送。
- 10 2015年10月24日（土）に開催された第10回北海道コミュニティ放送フォーラム・名寄ミーティング。全道から約60名のコミュニティFM関係者が集まった。私の講演は「ラジオの奥底にあるもの：電波・共同体・テクノロジー」というタイトルだった。

参考文献

- Fuller, Matthew, *Media Ecologies: Materialist Energies in Art and Technoculture*, Cambridge & London: MIT Press, 2005.
- 水越伸『メディアの生成：アメリカ・ラジオの動態史』（同文館、1993年）。
- 日本民間放送連盟『2008年度民放連メディアリテラシー実践プロジェクト報告書』（2009年）。
- 東京大学大学院情報学環メルプロジェクト・日本民間放送連盟編『メディアリテラシーの道具箱：テレビを見る、読む、つくる』（東京大学出版会、2005年）。



水越 伸 (みずこし・しん)

[生年月] 1963年生まれ。

[出身大学または最終学歴] 東京大学大学院社会学研究科

[専攻領域] メディア論

[主たる著書・論文]

『改訂版 21世紀メディア論』（放送大学教育振興会、2014年）『メディアリテラシー・ワークショップ：情報社会を学ぶ・遊ぶ・表現する』（東京大学出版会、2009年）『コミュニカルなケータイ：モバイル・メディア社会を編みかえる』（岩波書店、2007年）など。

[所属学会] ICA、IAMCR、日本マスコミュニケーション学会ほか

[ウェブサイト] <http://www.mediabiotope.com/>

Issues in the Depths of Radio: A New Sketches of an Old Medium

Shin Mizukoshi*

Although Shin Mizukoshi started his academic career as a media historian of the early days of radio, his interest has been drifted from this old medium for a long while.

Since around 2010, however, he has been involved in workshops, symposiums, and other activities related to radio once again. In Mizukoshi's mind, these new experiences relate to his historical research, and resonates with profound meanings.

In this essay, Mizukoshi sketches out his three recent radio-related activities : 1) a collaborative media literacy workshop involving radio broadcasters from Nankai Hoso and local high school students in Ehime Prefecture, 2) a symposium, "Media Ecology of Radio" at Yamaguchi Center for Arts and Media, 3) a trial of making storytelling radio programs produced by the editorial office of *5: Designing Media Ecology*. He also tries to discuss fundamental characters found in the depths of all type of radios.

Professor, Interfaculty Initiative in Information Studies, the University of Tokyo

Key Words : radio, community, digital storytelling, media literacy, media studies